埼玉大学紀要　教育学部，61(2):73-98（2012）

天台山の詩歌（其七）
――盛唐（中の下）

薄井俊二　埼玉大学教育学部国語教育講座

キーワード：天台山、天台集、漢詩、仏教文学、道教文学

はじめに

本稿は、天台山に関わる詩歌について検討を加えることを通して、当時の人々の天台山に対するイメージとその変遷を考察しようとするものである(1)。今回は、盛唐期の詩として李白の作品七点(2)と魏万の作品一点を取り上げる。

●凡例

・凡例は、先稿に同じ。

八　天台山の詩（其七）――盛唐（中の下）

B李白以外の人間が天台山を訪れることに関わるもの（一部）

【44】送王屋山人魏萬還王屋〔并序〕

王屋山の人魏萬の王屋に還るを送る〔并びに序〕

李白

☆前集巻上

★全唐詩巻一七五、宋本巻一四、王注本巻一六

＊長文なので、「序」、そして「詩」を六段に分け、それぞれごとに記述する。詩全体の解説は最後に記す。

「序」

■本文

王屋山人魏萬云、自嵩宋沿呉、相訪數千里、不遇。乘興遊台越、經永嘉、觀謝公石門、後於廣陵相見。美其愛文好古、浪跡方外、因述其行、而贈是詩。

■訓訳

王屋山の人魏萬云ふ、嵩宋より呉に沿ひ、相ひ訪ぬること數千里なるも、遇はず。興に乗じ台越に遊び、永嘉を經、謝公の石門を觀る。後に廣陵において相ひ見ゆ、と。其の文を愛し古を好み、方外に浪跡するを美す。因りて其の行を述べて、是の詩を贈る。

■文字の異同と校勘

宋本は、題に〔魏詩附〕と注する。

全唐詩・王注本は、右記の文に次を続ける。「一做、見王屋山人魏萬云、自嵩歴兗、遊梁入呉。計程三千里。相訪不遇。因下江東、尋諸名山、往復百越。後於廣陵一面。遂乗興、共過金陵。此公好奇愛古、獨出物表。因述其行、李遂有此作」。〔訪〕宋本作送。

■語注

○王屋山…河南省王屋県にある。三十六洞天の第一。玄宗が司馬承禎のために、麓に陽台宮を造営し彼を住まわせたところ。○魏万…「唐詩紀事」巻二二に記事がある。それによれば後の名は顥、上元年間（七六〇～七六二）に科挙に及第している。それ以前に李白と会って意気投合し、李白から詩文集の編纂を依頼されたという。詩集本体は伝わらないが、宋本巻一に「李翰林集序　前進士魏顥」を収録する。李頎に「送魏萬之京」（「全唐詩」巻一三四）があり、劉長卿に「歳夜喜魏萬成郭夏雪中相尋」（同巻一四八）、「題魏萬成江亭」（同）、「春日宴魏萬成湘水亭」（同巻一五〇）があり、宋本巻一四に魏万の「金陵酬李翰林謫仙子」を掲載する（本稿【45】）。○嵩宋…嵩山が昔の宋の地（河南省商丘）にあったのでかく言う。○謝公石門…謝霊運に「登石門最高頂」がある（「文選」巻二二）。

■口語訳

王屋山の人である魏万殿がおっしゃった「嵩山より呉の地に沿ってお尋ねすること数千里であったが、お会いできなかった。そこで興に任せて台州・越州まで足を伸ばし、永嘉を経て謝霊運が遊んだ石門山を観た。のち広陵においてようやくお会いできました」と。私李白は、魏万殿が文学を愛し、古を好み、俗世間の外を自由に遊ばれるのをすばらしいと思う。そこで彼の行動を記して、この詩を贈る。

「詩」

■本文並びに訓訳

【第一段】

僊人東方生	僊人　東方生
浩蕩弄雲海	浩蕩として雲海を弄ぶ
沛然來天遊	沛然として天に來りて遊び
獨往失所在	獨り往きて所在を失ふ
魏侯繼大名	魏侯　大名を繼ぎ
本家聊攝城	本(も)と　聊攝の城に家す
卷舒入元化	卷舒して　元化に入り
跡與古賢并	跡　古賢と并(あは)す
十三弄文史	十三にして　文史を弄し
揮筆如振綺	筆を揮へば　綺(あやぎぬ)を振ふが如し
辯折田巴生	辯は田巴生を折(くじ)き
心齊魯連子	心は魯連子に齊(ひと)し
西涉清洛源	西のかた清洛の源に涉り

頗驚人世諠　頗る人世の諠なるに驚く
採秀臥王屋　秀を採りて王屋に臥し
因窺洞天門　因りて窺ふ洞天の門

■文字の異同と校勘

［來］宋本・全唐詩・王注本作乗。［初四句］宋本・全唐詩・王注本は「一作、東方不辭家、獨訪紫泥海。時人少相逢、往往失所在」を注する。

■語注

○東方生…前漢時代の滑稽、東方朔。「漢武内伝」に「東方朔、一旦乗龍飛去。……大霧覆之、不知所適」とある。○魏侯繼大名…「春秋左氏伝」閔公元年に「晉侯……賜畢萬魏、以爲大夫。卜偃曰、畢萬之後必太。萬、盈數也。魏、大名也」とある。戦国魏の万という名の人物と唐代の魏万とを重ねている。○聊攝…山東省聊城。○卷舒…屈伸。○元化…天地の大化、道。○田巴・魯連子…「太平御覽」巻四六四に見える。どちらも戦国時代の弁舌家、遊説家。○清洛源…清洛は洛水。洛陽など中原を表す。○採秀…「楚辞」九歌・山鬼に「採三秀兮山間」とある。秀は霊草、芝草。

■口語訳

仙人である東方朔は
ひろびろと、雲海を自由に弄び
あっという間に天を往来し
その痕跡も分からなくなった
君はまさにその大名を継ぐものであり
もとは聊城を出身とされ
自由に世間を出入りされ、ついには大いなる道に合一され
その痕跡は古人賢者と同じく消え去ってしまった
君は十三才で文章や史書を駆使され
筆を執れば綾絹の様な美しい文章を作られた
その弁舌はあの田巴をも打ち負かすほどであり
その心意気は魯連子に匹敵するほどであった
君は西のかた中原まで来られ
人の世の騒がしさに驚かれた
そこで霊草を採ろうと王屋山に入って起居され
仙界に通じる洞天を捜されたのである

■解説

韻字は、第一段は「海・在」で、上声一〇賄の韻。「名・城・并」で、下平八庚の韻。「史・綺・子」で、上声四紙の韻。「源・諠・門」で、上声一三元の韻。

魏万を紹介した部分。隠士の東方朔に並ぶ仙気を帯びており、若い頃から才気に溢れており、王屋山に隠棲したことを述べる。

【第二段】

竭來遊嵩峯　竭(さ)り來りて嵩峯に遊び
羽客何雙雙　羽客　何ぞ雙雙たるや
朝携月光子　朝には携ふ月光子

暮宿玉女牕　暮には宿る玉女牕
鬼谷上窈窕　鬼谷　上に窈窕として
龍潭下奔潨　龍潭　下に奔潨たり

東浮汴河水　東に浮かぶ汴河の水
訪我三千里　我を訪ふこと三千里
逸興滿呉雲　逸興　呉雲に滿ち
飄颻浙江汜　飄颻たり　浙江の汜（ほとり）

揮手杭越間　手を杭越の間に揮ひ
樟亭望潮還　樟亭にて潮の還るを望む
濤卷海門石　濤は卷く海門の石
雲横天際山　雲は横たはる天際の山
白馬走素車　白馬　素車を走らせ
雷奔駭心顔　雷奔　心顔を駭（おどろ）かす

■文字の異同と校勘

［牕］全唐詩・王注本作窗。［浙］全唐詩作淛。［雲］底本・宋本作雪、倣全唐詩・王注本改雲。

■語注

○月光子…嵩山の仙人。○玉女牕…嵩山にあった神仙に関わる場所。○鬼谷…嵩山のある登封県の東南、告成鎮にあった場所で、戦国時代の鬼谷先生の居所と伝える。○龍潭…嵩山の東にあった河川。○浙江…銭塘江。○樟亭・海門…浙江省の地名。○白馬・雷奔…枚乗「七發」に「觀濤乎廣陵之曲江。……其少進也、浩浩溰溰、如素車白馬之張。凌赤岸、簪扶桑、横奔似雷行」とある。【40】に既出。

■口語訳

さて君はその後嵩山に遊び
なんと仙人達と一緒に楽しまれたとか
朝には月光子と手を携えて出かけられ
夕べには玉女牕にお泊まりになる
その上では鬼谷が美しくあり
その下には龍潭が盛んに水音を立てている

やがて東に汴水に浮かばれ
三千里をかけて私を訪ねてこられた
その秀逸なる興趣は呉地方に満ちあふれ
銭塘江のほとりで飄々と漂われた

杭州・越州のあたりであちこちを指さしながら遊覧し
樟亭では遙かに潮流が溯るのを眺めた
波濤は海門の石に逆巻き
水しぶきが雲となって天との境目まで立ち上っている
その様は白馬が白絹の車を牽いているかのようで
雷が走るかのような大音響には、心も顔も驚くばかり

■解説

韻字は、「峯・雙・牕・潨」で、上平二冬の韻。「水・里・汜」

で、上声四紙の韻。「間・還・山・顔」で、上平一五刪の韻。

内容は、魏万が李白を訪ねて嵩山から呉までやってきたが、会えず、彼の地を歴訪した様を描く。銭塘江の大溯流を描写する。

【第三段】

遙聞會稽美　遙かに會稽の美を聞き
一弄耶溪水　一に耶溪の水を弄ぶ
萬壑與千巖　萬壑と千巖とがあり
崢嶸鏡湖裏　崢嶸たり　鏡湖の裏に

秀色不可名　秀色　名すべからず
清輝滿江城　清輝　江城に滿つ
人遊月邊去　人は月邊に遊びて去り
舟在空中行　舟は空中に在りて行く

此中久延佇　此の中に久しく延佇し
入剡尋王許　剡に入りて王許を尋ぬ
笑讀曹娥碑　笑みて讀む曹娥の碑
沈吟黄絹語　沈吟す黄絹の語

天台連四明　天台は四明に連なり
日入向國清　日入りて國清に向かふ
五峯轉月色　五峯　月色を轉じ
百里行松聲　百里　松聲を行る

靈溪恣沿越　靈溪　恣に沿越し
華頂殊超忽　華頂　殊に超忽たり
石梁横青天　石梁　青天に横たはり
側足履半月　足を側して　半月を履む

■文字の異同と校勘

［一弄］全唐詩作且度［一作一弄］。［恣］全唐詩作咨。

■語注

○萬壑・千巖…「世説新語」言語に「顧長康従会稽還……云、千巖競秀、萬壑爭流」とある。○鏡湖…浙江省会稽山麓にある湖。○王許…書聖王羲之と道士許邁。○笑読二句…「太平寰宇記」巻九六に、曹娥は漢代の孝女で、父がおぼれ死んだのを痛み、屍に抱きついて死んだ。県令が顕彰の碑を立てたところ、そこを訪れた蔡邕が碑銘を読み、「黄絹幼婦」を含む八字を題字として記した、という。さらに「世説新語」捷悟に、曹操がその碑の題字を読み、「黄絹」とは「色」のついた「糸」であり、それを組み合わせて一字にすると「絶」となる、などと読み解いた、という。○天台連四明…【36】に「天台隣四明」とある。

■口語訳

君は遙かに会稽の山水の美を聞き及び
耶溪を楽しみにやってこられた
そこには数え切れないくらいたくさんの渓谷や渓流があって
鏡湖の湖面に、険しい峯々を映している

そのすばらしい景色は名状しがたく
清らかな光が河べりのまちに満ちあふれている
人々は湖面に映る月の側に遊び
船も空に浮かんでいるかのようである

その世界にしばらく滞留し
やがて剡溪を溯って王羲之や許邁のような清流を尋ねる
蔡邕が記した曹娥の碑銘を読み
曹操がやったように「黄絹」などの謎かけの言葉を楽しく解読し
　たりされた

更に奥深く天台山に進まれるが、そこは四明山に連なるところ
日の落ちる夕べ、国清寺に向かう
月が寺を囲む五峯を順々に照らし
百里もの間、松の梢を鳴らす風の音が流れていくばかり

霊妙な渓流が縦横に流れ
華頂峯が忽然と聳え立つ
石梁は青空に横たわり
半月ばかりのわずかな足がかりに足をかけて渡る

■解説

韻字は、「美・水・裏」で、上声四紙の韻。「名・城・行」で、下平八庚の韻。「佇・許・語」で、上声六語の韻。「明・清・聲」で、下平八庚の韻。「越・忽・月」で、入声六月の韻。

内容は、魏万が李白を尋ねて、更に足を台州・越州に伸ばして遊歴したことを描く。

その中に、台州の景勝を代表するものとして天台山が登場し、その描写に八句が費やされている。まず「天台」と総称し、次いで山中の名勝をあげていく。「國清」寺とそれを「五峯」が囲んでいることや、孫綽も伝える松並木を「百里行松聲」として表現する。さらに「靈溪」「華頂」「石梁」をあげ、青空に聳える峯やそれに懸かる明月、風や渓流の音などを駆使しており、天台山を鑑賞に堪える名山として描いている。ただし、先稿で見た李白自身が訪れたときに作った作品（【35】など）のような、遊仙的な雰囲気はあまり感じられない。

【第四段】

眷然思永嘉　眷然として永嘉を思ひ
不憚海路賒　海路の賒（はるか）なるを憚らず
挂席歴海嶠　席を挂（かか）げて海嶠を歴し
迴瞻赤城霞　迴りて瞻（み）る　赤城の霞

赤城漸微没　赤城　漸く微没し
孤嶼前嶢兀　孤嶼　前に嶢兀たり
水續萬古流　水は續く　萬古の流
亭空千霜月　亭は空し　千霜の月

縉雲川谷難　縉雲　川谷難く
石門最可觀　石門　最も觀るべし

瀑布挂北斗　瀑布　北斗に挂り
莫窮此水端　此の水　端を窮むる莫し
噴壁灑素雪　壁に噴きて素雪を灑ぎ
空濛生晝寒　空に濛として　晝なほ寒きを生ず

却尋惡溪去　却って尋ぬ　惡溪に去らんことを
寧懼惡溪惡　寧んぞ懼れん　惡溪の惡しきを
咆哮七十灘　咆哮す　七十の灘
水石相噴薄　水石　相ひ噴薄す
路創李北海　路は創まる　李北海
巖開謝康樂　巖は開く　謝康樂
松風和猿聲　松風　猿聲に和し
搜索連洞壑　索を搜して洞壑に連なる

徑出梅花橋　徑は出づ　梅花の橋
雙溪納歸潮　雙溪　歸潮を納る
落帆金華岸　帆を落とす　金華の岸
赤松若可招　赤松　招くべきがごとし
沈約八詠樓　沈約　八詠の樓
城西孤岩嶢　城西　孤り岩嶢たり

岩嶢四荒外　岩嶢たり　四荒の外
曠望群川會　曠しく望む　群川の會するを
雲捲天地開　雲捲き　天地開け
波連浙西大　波連なりて　浙西　大なり

亂流新安口　亂流す　新安の口
北指嚴光瀨　北に指す　嚴光の瀨
釣臺碧雲中　釣臺は碧雲の中
邈與蒼梧對　邈かに蒼梧と對す

■文字の異同と校勘

［眷］全唐詩作忽。［尋］全唐詩・王注本作思。［詠］王注本作咏。［梧］全唐詩・王注本作嶺。

■語注

○眷然…痛切に思う様。○挂席…謝霊運の詩を踏まえる。【35】既出。○孤嶼…永嘉の江中に聳える山。謝霊運に「登江中孤嶼」（「文選」巻二六）の詩がある。○嶢兀…ごつごつと聳える様。○濛…霧雨が降る様。○李北海…唐の李邕（六七八～七四七）。○搜索…王褒「洞簫賦」（「文選」巻一七）に「玄猿悲嘯、搜索乎其間」とあり、李善は「搜索、往来貌」と注する。○雙溪…金華県にある渓流。○金華…浙江省金華県。今は金華ハムで有名。まちの東北に金華山があり、双龍洞などの三洞が有名。三十六小洞天の最後。○赤松…赤松子は仙人。金華山に棲んだといい、金華山を赤松山ともいう。いま赤松道院がある。○沈約八詠樓…梁の沈約が八句の詩を詠んだという楼。○岩嶢…高く聳える様。何晏「景福殿賦」（「文選」巻一一）に「岩嶢岑立」とある。○群川會…金華を流れる婺水は北西して蘭渓で衢水と合流し、蘭江となる。蘭江は北流して西から来た新安江と合流し、富春江となる。富春江は諸川を受け入れながら東北に流れ、富陽あたりから銭塘江と名を変える。これらのどれかを指すというよりは、これらの河川が

合流していく様をまとめて表現したものか。〇浙西…銭塘江以西の河川。〇嚴光・釣臺…富春江にある名勝。河沿いに高さ七十メートルあまりの立方体の岩山が聳える。後漢時代に隠者の厳光（子陵）がここ釣りをしたという。李白はじめ多くの文人が訪れて詩を作っている。〇蒼梧…湖南省の九疑山。南巡した舜がここで没したという。

■口語訳

君は永嘉のすぐれていることを思うや
海路の遠いことなどものともせず
蓆旗を掲げて海沿いの土地を遍歴された
そして海上から遙かに赤城山に架かる霞を眺められた

やがてその霞も見えなくなり
孤嶼山が目の前に聳えて来る
この江の水は永遠に流れ続けていくが
人が作った亭舎はやがて無くなってしまう

縉雲山のあたりは渓谷が険阻なところだが
その中でも石門山は最も見るべきに足る
滝は北斗星から懸かっているようで
水の出る場所を見極めることはできない
石壁から噴き出して白い雪のような水滴を降らせ
空には微雨が立ちこめて昼なお寒気を感じるほどである
更に悪渓の方に行こうとする
悪渓という名前など気にはしない
そこでは七十もの瀬が咆え叫び
水が石にぶち当たってすさまじくしぶきを上げる
ここへ至る道を開かれたのは李北海様だが
巌を開削されたのは謝霊運に溯るという
ここでは松風が猿の声と調和して
洞窟や谿谷を往来して流れていく

やがて道は梅花橋へ出る
そこには双渓が海の潮を引き入れている
金華のほとりで帆を下ろすが
ここからは赤松子を招き寄せることもできる
沈約が八句の詩を詠んだという楼閣が
城郭の西にひとり高く聳えている

その楼閣は四方荒漠たるなかに屹立しており
そこに登れば、遙かに、多くの川が流れ、合流するのが見える
雲は巻き上がり、天地は広々と開け
波濤は連なり、銭塘江以西の川はどれも川幅が広く流れている

やがて新安江との合流地点あたりで流れは逆巻き
北に転じて厳光が遊んだ瀬を目指して流れていく
厳光が遊んだ釣台は緑なす雲の中に浮かび上がり
遙かに蒼梧の山と向かい合っている

■**解説**

韻字は、「嘉・賒・霞」で、下平六麻の韻。「没・兀・月」で、入声六月の韻。「難・觀・端・寒」で、上平一四寒の韻。「惡・薄・樂・壑」で、入声一〇薬の韻。「橋・潮・招・嶢」で、下平二蕭の韻。「外・會・大」で、去声九泰の韻。「瀬・對」で、去声一一隊の韻。

内容は、魏万が李白を尋ねて、更に浙江省内を歴訪した様を描く。天台山から更に、孤嶼・縉雲山・石門山・悪渓・梅花橋・双渓とたどり、金華山に着く。金華のまちの楼閣から北を眺め、銭塘江の上流の諸河川が合流する様を描いた部分は、さながら高々度から俯瞰したかのようである。思いは遙か湖南省の蒼梧山にまで至っており、空間的な広がり感じさせる。李白の想像力が遺憾なく発揮された部分であると言えよう。末句の「蒼梧」を全唐詩・王注本は「蒼嶺」とする。そうすると厳光の釣台が青い山と向かい合っている、となる。その方が穏当だろうが、ここは李白の想像力が飛躍しているとして、省を越えた位置にある「蒼梧」を採用した。

【第五段】

稍稍來呉都　稍稍(やうや)く呉都に來たり
徘徊上姑蘇　徘徊して姑蘇に上る
煙緜横九疑　煙緜　九疑に横たはり
滲蕩見五湖　滲蕩として五湖を見る
目極心更遠　目極まりて　心更に遠く
悲歌但長吁　悲歌して　但だ長吁す
迴橈楚江濱　橈を廻らす　楚江の濱
揮策揚子津　策を揮ふ　揚子の津
身著白羊裘　身には白羊の裘を著け
昂藏出風塵　昂藏たりて　風塵を出づ
五月造我語　五月　我に造(いた)って語り
知非佁儗人　佁儗の人に非ざるを知る
相逢樂無限　相ひ逢ひて樂しむこと限り無く
水石日在眼　水石は　日に眼に在り
徒干五諸侯　徒だ五諸侯を干(おか)し
不致百金産　百金の産を致さず
吾友揚子雲　吾は友とす　揚子雲
弦歌播清芬　弦歌して　清芬を播す
雖爲江寧宰　江寧の宰たりと雖も
好與山公群　好んで山公と群す
乗興但一行　興に乗じて　但だ一行するのみなれば
豈知我愛君　豈に知らん　我の君を愛するを

■**文字の異同と校勘**

［徘徊］全唐詩作裴回。［白羊］宋本・全唐詩作日本。以下の注あり「裘則朝卿所贈、日本布爲之」。［佁］宋本作儘。［豈］宋本・全唐詩作且。

■**語注**

○九疑山…前節の蒼梧山。○五湖…太湖。○滂蕩…水が広々ゆったりとたゆたう様。○楚江…長江。○白羊裘…宋本などは日本裘とし、「裘は則ち朝卿（阿倍仲麻呂）の贈るところにして、日本の布もて之を爲る」と注する。○昂藏…誇り高く気概溢れる様。○佁儗人…愚か者。○五諸侯…漢の成帝期に、外戚の王氏五人を一度に列侯に封建した。そこから権力者、権勢家を表す。○楊子雲…漢代の蜀出身の文人官僚楊雄。諸注は、李白の友人の楊利物のことをいっているという。○弦歌…礼楽による教化。「論語」陽貨に「子之武城、聞弦歌之聲」とある。○清芬…高潔な人格。陸機「文賦」（「文選」巻一七）に「詠世徳之駿烈、誦先人之清芬」とある。○好寧…江蘇省の地名。李白に「江寧楊利物畫賛」がある（宋本巻二八）。○山公…竹林の七賢の山濤の山簡。

■口語訳

君はようやく呉都の蘇州に来たり
徘徊し、姑蘇山に登った
そこからの眺めは、はるか九疑山に連なる靄がかかり
眼下には太湖が広々と広がっている
視線が遠くまで広がれば、心も遙かに思いめぐらし
悲歌を口ずさんだり、長く吟じたりした

やがて長江の濱で櫂を廻らし
揚子江の港で上陸して馬を走らせた
君は白い羊の裘を身に着けており
誇り高く気概溢れて、俗塵から傑出している
この五月にようやく私の所にやってきて語り合い
立派な人であることがよく分かった

君と逢ってより以来楽しみは限りなく
共に山川の美景を眺めて楽しんだ
五諸侯のような権勢家には楯突いても
財貨には全く興味を示さなかったのである

私には楊雄のような人物である楊利物という友人がいる
彼は弦歌により礼楽を広め、清廉な香を振りまいている
好寧といった小都市の長官に過ぎないが
山簡のような風雅の士との遊びを好んでいる
興趣に乗じ、楊の所へは惟一度だけ共に行っただけなので
私が君を大切に思っていることは彼には分からないだろう

■解説

韻字は、第五段は「都・蘇・湖・吁」で、上平七虞の韻。「濱・津・塵・人」で、上平一一真の韻。「限・眼・産」で、上声一五潸の韻。「雲・芬・群・君」で、上平一二文の韻。

内容は、魏万が李白を尋ねて蘇州から広陵に行き、ようやく李白と出会えたこと。改めて魏万の人柄を述べ、更に知人の楊利物との交友を深められなかったことを残念がっている。

【第六段】

君 來 幾 何 時　君の來る　幾何（いくばく）の時ぞ
僊 臺 應 有 期　僊臺　應に期有るべし

東牕緑玉樹　東牕　緑玉の樹
定長三五枝　定めて三五の枝を長ぜん
至今天壇人　今に至るまで　天壇の人
當笑爾歸遲　當に笑ふべし　爾の歸るの遲きを
我苦惜遠別　我は苦（はなは）だ　遠別を惜しみ
茫然使心悲　茫然として　心をして悲しましむ
黄河若不斷　黄河　斷えざるが若く
白首長相思　白首　長へに相ひ思はん

■文字の異同と校勘

なし

■語注

○三五…三から五くらい、あまり多くない数字を表す。○天壇…王屋山の最高峰。

■口語訳

この次に君が私の所へ来てくれるのは何時のことだろう
君が行かれる仙境の楼台では、色々とお約束もあろうから
楼台の東の窓から見える碧の玉の木には
きっと少しばかり新たな枝が生じていることでしょう
王屋山最高峰の天壇山では、そこに棲む道士たちが
貴方が世俗の情にかられて帰還が遅くなっているのを、笑っているかもしれません
私はといえば遠い別れを惜しんでは
茫然として心を悲しませるのみ
黄河の水が絶えることがないように
白髪頭を抱えて永遠に君のことを思い続けるのです

■解説

第六段は、韻字は、「時・期・枝・遲・悲・思」で、上平四支の韻。

内容は、魏万が王屋山に帰ることを述べ、別れの悲しみを歌う。

全体を通しての解説。詩形は五言古詩。

大野は天宝九年（七五〇）とし、加藤はこれに倣う。安注は天宝一〇年（七五一）の作とする。

長大なので、六段に分けて記述した。全体として、魏万が王屋山に帰るのを見送る送別の詩だが、第一段と第六段だけをつなげても、送別の詩として成り立つ。この詩の特色は、第二段から第五段にかけてで、魏万が李白を追って、中原から呉越を遍歴した様を描いた部分であろう。おそらく自らの遊歴経験を踏まえつつ、魏万がそれをなぞっているであろうと想像し、同じ道を歩ませている。その間の叙景は、魏万の目を通してのものであるとされているが、実は李白の記憶から呼び起こされたものである。この二重性はおもしろい。

また、呉越の名勝を順々にたどりつつ紹介しており、さながら、「呉越旅遊大観」とでもいうべきものとなっている。

その中で、第三段の後半で天台山を登場させている。当該部分の解説を繰り返せば、国清寺・華頂峯・石梁飛瀑などの景勝地を

あげていき、聳える峯やそれに懸かる明月、風や渓流の音などを駆使して描写し、天台山を鑑賞に堪える名山として描いている。ただし、先稿であげた、李白自身が訪れたときに作った作品（【35】など）のような、遊仙的な雰囲気はあまり感じられないものとなっている。

【45】金陵酬李翰林謫仙子

金陵にて李翰林謫仙子に酬す

魏萬

☆前集など収録せず

★唐詩紀事巻二二、全唐詩巻二六一、李太白全集宋本巻一四、王注本巻一六

■本文及び訓訳

君抱碧海珠　君は抱く碧海の珠
我懐藍田玉　我は懐く藍田の玉
各稱希代寶　各おの希代の寶と稱され
萬里遙相燭　萬里　遙かに相ひ燭らす

長卿慕藺久　長卿は藺を慕ふこと久しく
子猷意已深　子猷は意ふこと已に深し
平生風雲人　平生　風雲の人
暗合江海心　暗に合ふ　江海の心

去秋忽乘興　去秋　忽として興に乘じ
命駕來東土　駕に命じ　東土に來たる
謫仙遊梁園　謫仙は梁園に遊び
愛子在鄒魯　愛子は鄒魯に在り

二處一不見　二處　一には見えず
拂衣向江東　衣を拂ひて江東に向かふ
五兩挂淮月　五兩　淮月に挂げ
扁舟隨海風　扁舟　海風に隨ふ

南遊呉越徧　南遊して呉越に徧く
高揖二千石　二千石に高揖す
雪上天台山　雪に上る天台山
春逢翰林伯　春に逢ふ翰林伯

宣父敬項託　宣父は項託を敬ひ
林宗重黄生　林宗は黄生を重んず
一長復一少　一は長　復た一は少
相看如弟兄　相ひ看ること弟兄の如し

惕然意不盡　惕然として意　盡きず
更逐西南去　更に逐に西南に去る
同舟入秦淮　舟を同にして秦淮に入るに
建業龍盤處　建業は龍盤の處なり

楚歌對|呉酒　楚歌　呉酒に對し
借問承恩初　借問す　恩を承くるの初め
宮買長門賦　宮は買ふ　長門の賦
天迎駟馬車　天は迎ふ　駟馬の車

才高世難容　才高く　世　容れ難く
道廢可推命　道廢れて　命を推すべし
安石重携妓　安石は重ねて妓を携へ
子房空謝病　子房は空しく病と謝す

金陵百萬戸　金陵　百萬戸
六代帝王都　六代　帝王の都
虎石|踞|西江　虎石　西江に　踞（うずくま）り
鍾山臨北湖　鍾山　北湖に臨む

湖|山信爲美　湖山は信に美たるも
王屋人相待　王屋の人　相ひ待つ
應爲岐路多　應に岐路に多なるがために
不知歳寒在　知らず　歳の　寒に在るを

君遊早晩還　君の遊　早晩還れ
勿久風塵間　久しく風塵の間におるなかれ
此別未遠別　此の別れは未だ遠別ならず
秋期到仙山　秋には仙山に到るを期せん

■文字の異同と校勘

宋本を底本とする。

［風］紀事・全唐詩作風。［淮］全唐詩作海。［海］全唐詩作長。［徧］全唐詩作遍。［雪］紀事作雲。［託］王注本・全唐詩作橐。［黄］紀事作王。［對］紀事作醉。［石］紀事作丘。［踞］全唐詩作據。［湖］全唐詩作二。

■語注

○長卿…前漢の司馬相如。もと犬子と名付けられていたが、戦国趙の藺相如の人となりを慕い、自ら相如と改名した（「史記」司馬相如列伝）。○子猷…晋の王徽之。「世説新語」任誕に、王徽之がある夜ふと隠者の戴逵に逢いたくなり、夜通し掛けて船に乗って会いに行った、という話を載せる。「子猷尋戴」という蒙求の標題にもなっている。○梁園…漢の梁王が造った庭園。【38】既出。○五兩…風をうかがう器具。航海に必携。○高揖…両腕を高く上げて会釈をすること。○二千石…漢代の官僚の俸給の一段階。郡守の俸給がこれであったことから、郡守そのものの呼称となり、のちには地方長官の呼称となった。○宣父…「新唐書」礼楽志によれば、貞観一一年に、孔子を宣父と呼ぶこととなった。○項託…項橐とも。七歳の時、孔子が彼を師匠としてあがめたという（「淮南子」脩務他）。○林宗…郭太（泰）。後漢の名士。よく人を論評した。「後漢書」巻六八本伝。○黄生…黄憲。歳十四で見いだされるなど早熟だった。「後漢書」巻五三本伝。郭太が黄憲の度量の量りがたさを、広大な池に喩えた話は「後漢書」黄憲伝に見えるが、「黄憲萬頃」という蒙求の標題にもなっている。○秦淮…秦の始皇帝が作ったと伝えられる運河。南京（金陵）のまちを流れる。○長門賦…司馬相如の作。「文選」巻一七所収。武帝の寵愛を失い長門宮に居た陳皇后が、大金を積んで、司馬相如に自らの悲愁の情を詠わせたものという。○北湖…

玄武湖。

■口語訳

君は碧なす大海が産する真珠を抱いており
私は有名な藍田の宝玉を懐いている
それぞれ稀代の宝玉と称されているが
万里もの距離に離れており、遠くから照らしあっている

司馬相如は藺相如を長く慕い続け
王徽之は戴逵のことを深く思っていた
平時より風や雲を楽しむひとは
遠い江や海を楽しむ心を持っているのだ

そんな君は、昨年の秋に、忽然と興を起こされ
馬車を走らせて東の土地に行かれた
地上に降りた仙人である君は、梁王の庭園に遊ばれ
愛し子と山東ですごされた

しかし、私と君の居る所が二箇所に別れていれば、ご一緒することはできない
そこで私も衣をからげ、江東に向かうことにした
風をうかがう器具を、淮水に昇る月にかかげ
小さな小舟で海風のままに進んだ

南遊して呉越の地に普く遊び
地方長官たちとも交わりを持った
そして雪の中、天台山に登ったりしたが
春になりようやく李翰林殿とお会いすることができた

孔子は自分より年少の項託を師として敬い
郭太は年長者の黄憲を高く評価した
一方は年長で、一方は年少との違いはあるが
どちらも兄弟のようにお互いを重んじ、慈しんだのである

思いが尽きることのないままに時は過ぎていき
更に西南へ向かうこととなった
共に船に乗り、秦淮運河に乗り入れて金陵に向かったが
ここ金陵の地は龍が蟠る佳地である

楚の歌を歌いながら呉の地の酒に向かい
皇帝よりの恩寵を受けたことなどをおたずねする
高貴な方々が、君から「長門賦」のような優れた作品を買われ
天子は四頭立ての馬車で君をお迎えになった

しかしそうした高い才能は世俗の受け入れるところではなく
正しい道が廃れている世の中では命運も推し量られる
晋の謝安様は常に芸妓を携えて遊び
漢の張良殿も国家が確立した後は病を理由に隠遁した

ここ金陵は百万戸の殷賑をほこり

六代にわたる帝王の都である
虎石山が江の西に位置し
鍾山が玄武湖に臨むという、めでたい帝王の宅をなしている

この地の湖や山はまことにすばらしいものだが
王屋山では私を待っている人が居る
分かれ道がたくさんあるので迷ってしまい
いつの間にか歳も暮れているのに気がつかなかった

君は遊覧を続けられても、早晩に還るがいい
長く世俗の塵の中に居るのはおよしなさい
今ここでの別れは長いお別れではありません
秋には仙山の王屋山においでになることを約束してください

■解説

魏万は、王屋山の道士。【44】語注参照。

韻字は、「玉・燭」で入声二沃の韻。「深・心」で下平一二侵の韻。「土・魯」で上声七麌の韻。「東・風」で上平一東の韻。「石・伯」で入声一一陌の韻。「生・兄」で下平八庚の韻。「去・處」で去声六御の韻。「初・車」で上平六魚。「命・病」で去声二四敬の韻。「都・湖」で上平七虞の韻。「待・在」で上声一〇賄の韻。「間・山」で上平一五刪の韻。五言古詩。

この詩は、【44】に対する留別の詩であろう。併せ読むことで理解が深まるものと思われる。李白の詩文集が、あえて魏万のこの詩を収録しているのも、そうした観点からのものと思われる。なお全唐詩に収録する魏万の詩はこれのみ。

李白を追って江南を旅したことをいい、その中で天台山に登ったことをいう。遍歴した場所は数多い中で、固有名詞として天台山をあげていることから、魏万には、この山が彼の地域を代表するものだとの認識があったのだろう。しかしその描写は「雪の冬に天台山に登り、その春に金陵に行って李白にあった」というに留まり、天台山に関する具体的な描写があるわけではない。

C神山としての天台山を詠うもの（一部）

【47】秋夕書懷　秋夕に懷ひを書す　李白

☆前集等収録せず

★全唐詩巻一八三、宋本巻二二、王注本巻二四

■本文と訓読

北風吹海雁　北風　海雁を吹き
南渡落寒聲　南渡　寒聲を落とす
感此瀟湘客　此に感ず　瀟湘の客
淒其流浪情　淒其たり　流浪の情
海懷結滄洲　海を懷ひては滄洲を結び
霞想遙赤城　霞を想ひては赤城遙かなり
始探蓬壺事　始めて蓬壺の事を探りてより
旋覺天地輕　旋(ま)た天地の輕きを覺ゆ
澹然吟高秋　澹然として高秋を吟じ

閑臥瞻太清　閑臥して　太清を瞻(みる)
蘿月掩空幕　蘿月は空幕を掩ひ
松霜皓(しろ)前楹　松霜は前楹を皓くす
滅見息群動　見を滅して群動を息(や)め
獵微窮至精　微を獵して至精を窮む
桃花有源水　桃花に源水有り
可以保吾生　以って吾が生を保つべし

■文字の異同と校勘

宋本を底本とする。

題に、宋本などは「一作秋日南遊書懐」を加える。

［遙］全唐詩作遊。［閑］全唐詩作閒。［皓］全唐詩・王注本作結。

■語注

○淒其…寒く寂しい様。「詩経」邶風・緑衣に「絺兮綌兮、淒其以風」とある。○息群動…陶淵明「飲酒」に「日入群動息」とある。夜になってあらゆる生き物が活動を停止すること。ここでは、自らの心の働き・識見を停止することで、欲望や思考の発動を停止することと取った。

■口語訳

北風が海浜の雁に吹きつけ
雁は南に渡って寒々とした声を放つ
瀟湘をさまよう旅人はその声に感応し
流浪を傷む感傷に迫られている
海を思いやれば仙境である滄洲のことが思い起こされ
霞に思いを馳せれば赤城山が遙かに思われる
蓬莱山といった神山のことを探訪し始めてからは
この世の天地とて軽いものだと覚った
安らかに、たけなわの秋を吟じ
心静かにうち伏して天空を眺める
蔦を透かして見える月は空を蔽わんばかりに広がり
松に置く霜を照らしては見前の柱を白く輝かせている
識見を滅却して、あらゆる心の活動を停止し
精微の道をのみ追い求めて、至精の境地を極める
桃花の川をたどっていけば、その源には仙境がある
私もそこへ至って生を長く保とう

■解説

韻字は、「聲・情・城・輕・清・楹・精・生」で、下平八庚の韻。五言古詩。

大野・安注とも乾元二年（七五九）、恩赦を得て帰還する途中の作とする。

遊仙指向の詩ではあるが、大野が「深い悲哀感は見られ」ず、「すべての詩句に見えているのは遊仙的気分そのものである」というのはどうであろうか。仙界の明るさや、あっけらかんとした昇仙へのあこがれはここにはない。悲傷観が漂う、しっとりとした、閑かさが伝わってくるように感じる。

あこがれの仙境を述べるのだが、蓬莱山の前触れとして、現世の山と神山との中間的存在として、赤城山が滄洲と並んで用いられている。天台山は、そこへ到達したい神仙の山とされている。

表現についてみれば、赤城山が霞をまとうのは例の通りで、常套的ではある。しかし、「現前の海浜の光景」→「滄洲」→「霞む赤城山」→「蓬莱山」という連想と思索の深まりは、ぎこちなさが無く、円熟味を漂わせているというのは主観的に過ぎるか。

【48】江上答崔宣城　江上にて崔宣城に答ふ

李白

☆前集別集

★全唐詩巻一七八、宋本巻一七、王注本巻一九

■本文と訓訳

太華三芙蓉　太華に三あり　芙蓉
明星玉女峯　明星　玉女峯
尋仙下西嶽　仙を尋ねて　西嶽を下り
陶令忽相逢　陶令に　忽ち相ひ逢ふ
問我將何事　我に問ふ　何事を將(も)って
湍波歴幾重　湍波　幾重を歴たる
貂裘非季子　貂の裘は季子に非ず
鶴氅似王恭　鶴の氅(はね)は王恭に似たり
謬忝燕臺召　謬(あやま)って燕臺の召を忝(かたじけ)なくし
而陪郭隗蹤　而も郭隗の蹤を陪す
水流知入海　水流れて　海に入るを知り
雲去或從龍　雲去りて或いは龍に從ふ
樹繞(めぐ)蘆洲月　樹に繞る　蘆洲の月
山鳴鵲鎮鐘　山に鳴る　鵲鎮の鐘
還期如可訪　還期　如し訪ふべくんば
台嶺蔭長松　台嶺　長松に蔭(かげ)せられん

■文字の異同と校勘

［歴］底本空格。倣宋本補。［繞］底本作色。倣宋本・全唐詩・王注本改繞。
［蘆］底本作曉。倣宋本・全唐詩・王注本改蘆。

■語注

○崔宣城…宣城は安徽省の県名。そこの長官をしていたのであろう。名は欽、それ以外は不詳。李白「趙公西侯新亭頌」（「全唐文」巻三四八）に「惟十有四載……宣城令崔欽」とある。李白に「經亂後、將避地剡中、留贈崔宣城」（宋本巻一一）がある。○陶令…陶淵明。崔某に重ねる。○季子…戦国時代の遊説家蘇秦。「戦国策」趙策に、李克が蘇秦に黒貂の裘を贈り、それによって蘇秦は秦に入国できたという話を載せる。○王恭…東晋の名士。「晋書」王恭伝には、彼が鶴の羽根で作った衣を着て雪の中を歩いていると、人が「これこそ神仙だ」と嘆じたという話を載せる。○燕臺…戦国時代、燕王が賢者を招くために作らせた台。○郭隗…いわゆる「隗より始めよ」の人物。○雲去或從龍…「易」乾に「雲從龍、風從虎」とある。同類感応の喩え。○蘆州・鵲鎮…宣城あたりの地名。○台嶺蔭長松…孫綽「遊天台山賦」に「蔭落落之長松」とある。

■口語訳

太華山には三つの峯があり、芙蓉峯
明星峯、玉女峯である

私は仙人を尋ねて西岳華山を訪れてから下山すると
陶淵明の如きお方にばったりお会いした
その方は私に問われた、どうして
幾重ものさざ波を越えていらしたのですかと
私は蘇秦のような貂の裘を着て、世間的な成功を求めている訳で
　はなく
王恭のように鶴の羽根を纏って神仙のように振る舞いたいのです
しかしこの度、君王からの招聘を受けることとなり
郭隗が登用された跡を追うように出世していくかも知れない
水は流れていき、最後は海に入ることは誰でも知っている
雲が龍に従うように、結局は有能の士は君王に採用されるのだ
おりしも蘆州では木々を月が廻るように照らし
鵲鎮からの鐘の音が山間に響いている
（私はこれから出発するが）帰って来たときに君を訪ねることが
　できたなら
一緒に天台山へ登り、長い松並木の陰で憩いましょう

■解説

韻字は、「蓉・峯・逢・重・恭・蹤・龍・鐘・松」で、上平二冬の韻。五言排律。

大野は至徳元年（七五六）の作とし、安注は天宝一二年（七五三）の作とする。

嵩山から下山し、出会った人に、これから君王に登用されること告げ、功成り名遂げた後に、一緒に隠棲しましょうと述べるものとなっている。自分の才能を高く評価していて、成功を疑っていないところは、李白らしい。天宝の始めの作か、永王に声を掛けられた折の作か。小躍りするような喜びを爆発させている訳ではないので、後者だろうか。

この詩では、成功を収めた後に隠棲する場所として天台山をあげている。簡略な描写しかないので詳しい考察はできないが、あざやかな仙境の描写はなく、閑かな隠遁生活を送る場として描かれている。一応**C**に入れたが、仙気には乏しい。

D山岳を描く絵画に関わるもの

【49】塋禪師房觀山海圖

塋禪師の房にて山海の圖を觀る

李白

☆前集等収録せず

★全唐詩巻一八三、宋本巻二〇、王注本巻二〇

■本文と訓訳

眞僧閉精宇　眞僧　精宇を閉じ
滅跡含達觀　跡を滅して　達觀を含む
列嶂圖雲山　列せし嶂に　雲山を圖し
攢峯入霄漢　攢(あつ)まる峯は　霄漢に入る
丹崖森在目　丹崖　森として目に在り
清晝疑卷幔　清晝に　幔を卷くかと疑ふ
蓬壺來軒牕　蓬壺　軒牕に來たり
瀛海入几案　瀛海　几案に入る

煙濤争噴薄　煙濤　争ひて噴薄し
島嶼相凌亂　島嶼　相ひ凌亂す
征帆飄空中　征帆　空中に飄り
瀑水灑天半　瀑水　天半に灑ぐ
崢嶸若可陟　崢嶸として　陟るべきが若く
想像徒盈歎　想像し　徒(ただ)に盈歎す
杳與眞心冥　杳として眞心と冥(くら)く
遂諧靜者玩　遂に靜者の玩に諧ふ
如登赤城裏　赤城の裏に登るが如く
揭歩滄洲畔　揭げて滄洲の畔を歩むがごとし
即事能娛人　事に即し能く人を娛しましめ
從茲得蕭散　茲れより蕭散を得ん

■文字の異同と校勘

宋本を底本とする。

［驄］全唐詩・王注本作窗。［蕭］全唐詩作消。

■語注

○瑩禪師…不詳。○滄洲…東海の彼方にあるとされた神山で、隠者の住まいもかく言う。○即事…その場のできごと、その場の光景。○蕭散…しずかでひっそりとした様。またさっぱりとしてこだわりのない様。

■口語訳

真の僧である瑩禪師は寺院の中に閉じ籠もり
その姿を俗世間から全く消し去り、達観の境地におられる

（禪師の部屋には）山脈のように並んだ屏風に雲や山が描かれ
その峯々は天の河に突き入らんばかり
赤い崖に木々が生い茂るのが目に見え
清らかな昼間に幔幕を張り巡らしたかのよう
神山の蓬壺山が軒端に来
仙境の瀛海が机のすぐ側まで迫っている
煙る波が争い迫り
島々がそれとせめぎあっている
海上を行く船の帆が空高く翻り
滝のようなしぶきが天の半ばから降り注いでいる
その険しい山々はまるで歩いて登れるかのようだが
（それは叶わず）想像して嘆息するばかり
この絵の奥深さは真の心と微かに符合し
まったく静寂を好む者の弄び物として最適である
（この絵を眺めていると）あの霊峰赤城山に登ったかのようで
衣を掲げてのあたりを歩いているような気持ちになる
この場に見える光景は人を娛しませるものなので
こころを静かにさせるものとなるのだ

■解説

韻字は、去声一五翰と上平一四寒とで通韻か。「觀・漢・幔・案・亂・半・歎・玩・畔」で翰、「散」で寒の韻。五言古詩。

李白に「秋夜宿龍門香山寺、奉寄王方城十七丈・奉國瑩上人・從弟幼成・令聞」の詩があり（宋本巻一二）、宋本の題下に「洛陽」とあることから、洛陽滞在時の作ではないかと推測されてい

る。当該詩も同じ頃のものと推測され、大野氏は開元二二年（七三四）、安注は同二四年（七三六）の作とする。

禅師の房に飾られている山海の絵画を眺め、その絵を称讃する詩。「如登赤城裏，掲歩滄洲畔」の句があって、天台山の赤城山が、遊仙先の代表として、神仙或いは隠者の住まいである滄洲と並んで登場している。六朝以来の、神山としての天台山像である。

【50】當塗趙炎少府粉圖山水歌

當塗の趙炎少府の粉圖山水の歌

李白

☆前集等収録せず

★文苑巻三三九、全唐詩巻一六七、宋本巻七、王注本巻八

■本文と訓訳

峨眉高出西極天　峨眉は高く西極の天に出で
羅浮直與南溟連　羅浮は直ちに南溟と連なる
名工繹思揮彩筆　名工　繹（たず）ね思ひて彩筆を揮ひ
驅山走海置眼前　山を驅り海を走らせて眼前に置く
滿堂空翠如可掃　滿堂の空翠　掃ふべきが如く
赤城霞氣蒼梧煙　赤城の霞氣　蒼梧の煙
洞庭瀟湘意渺緜　洞庭　瀟湘　意は渺緜
三江七澤情洄沿　三江　七澤　情は洄沿す
驚濤洶湧向何處　驚濤　洶湧す　何れの處に向かひ
孤舟一去迷歸年　孤舟　一たび去りて　歸年に迷ふ
征帆不動亦不旋　征帆　動かず　亦た旋らず
飄如隨風落天邊　飄如として風に隨ひ　天邊に落つ
心搖目斷興難盡　心は搖れ　目は斷へ　興盡き難く
幾時可到三山巔　幾時か到るべき　三山の巔
西峯崢嶸噴流泉　西峯　崢嶸たりて　流泉を噴き
横石蹙水波潺湲　横石　水を蹙（さえぎ）り　波　潺湲（せんかん）たり
東崖合沓蔽輕霧　東崖　合沓として　輕霧に蔽はれ
深林雜樹空芊緜　深林　雜樹　空しく芊緜たり
此中冥昧失晝夜　此の中　冥昧にして晝夜を失へども
隱机寂聽無鳴蟬　机に隱りて寂かに聽く無鳴の蟬
長松之下列羽客　長松の下　羽客を列ね
對坐不語南昌仙　對坐し語らず　南昌の仙
南昌仙人趙夫子　南昌の仙人　趙夫子
妙年歷落青雲士　妙年　歷落たり　青雲の士
訟庭無事羅衆賓　訟庭　事無く　衆賓を羅（つら）ね
杳然如在丹青裏　杳然として丹青の裏に在るが如し
五色粉圖安足珍　五色の粉圖　安くんぞ珍とするに足らん
眞山可以全吾身　眞山　以て吾が身を全うすべし
若待功成拂衣去　若し功成るを待ちて、衣を拂ひて去らんとせば
武陵桃花笑殺人　武陵の桃花　人を笑殺せん

■文字の異同と校勘

宋本を底本とする。

［高出］文苑作西出。［西極］文苑作高極。［工］全唐詩作公。［繹］文苑作逸。［揮］文苑作輝。［彩］王注本作綵。［驅］文苑作馳。［滿］文苑作蒲。［可］文苑作何。［霞］文苑作日。［峯］文苑作風。［蔽］文苑作開。［緜］文苑作眠。［青］文苑作霄。［山］全唐詩作仙。

■語注

○當塗…今の安徽省当塗県。○趙炎…不詳。李白に「寄當塗趙少府炎」（宋本巻一二）、「送當塗趙少府赴長蘆」（宋本巻一四）がある。○少府…県尉。○峨眉…蜀の名山峨嵋山。○羅浮…南海沿いの霊山。○空翠…山上の空に近いところの輝くような緑。謝霊運「過白岸亭詩」（「古詩紀」巻四八）に「空翠難強名、漁釣易爲曲」とある。○蒼梧…湖南省の山。【44】参照。○洞庭…洞庭湖あたり。○瀟湘…洞庭湖の南の瀟水・湘水あたり。○三江…三筋の江。異説多し。○七澤…司馬相如「子虚賦」（「文選」巻七）に「楚有七澤」とある。○洄沿…謝霊運「過始寧墅」（「文選」巻二六）に「水涉盡洄沿」とある。○合沓…高く大きい様。謝朓「敬亭山詩」（「文選」巻二七）に「合沓與雲齊」とある。○芊緜…草木が鬱蒼と茂る様。謝霊運「山居賦」（「宋書」巻六七謝霊運伝）に「孤岸竦秀、長洲芊緜」とある。○南昌仙…「漢書」梅福伝に、梅福は南昌の尉となったが、のち昇仙したという話を載せる。○歴落…磊落に同じ。心がさっぱりしてること。○丹青…絵画。○武陵桃花…陶淵明「桃花源記」を踏まえる。

■口語訳

峨嵋山は西の果てとも言うべき蜀の地に天高く聳え
羅浮山は南の冥海と直につながっている
名工が思いを凝らして絵筆を揮い
山を追い立て、海を走らせて、ここ眼前に置いている
部屋いっぱいの緑は手で払うことができるようで
赤城山にかかる霞や、蒼梧山を包む靄がたちこめる
洞庭湖や瀟水湘水の水を見ては思いは果てなく
三江や七澤の間を気持ちが溯っていく
逆巻く大波はわき上がり、いったいどこへ向かうのだろうか
ただ一艘の小舟が浮かんでいくが、いつになったら戻ってくるのだろう
行く船の帆は動かないし、また廻ることもしないが
飄々と風に漂い、天の果てまで流れていくのか
（その小舟に乗れば）心は揺れ動き目は見えなくなっても、興趣は尽きず
何時の日か、海中の三神山にも至れることだろう
西の峯は険しく滝を噴き上げ
横たわる石が水を遮り、波はざあざあと音を立てる
東の崖は高く聳えて細やかな霧に蔽われ
雑樹を交えた深い山が鬱蒼としている
この世界は薄暗く、昼夜の別も分かちがたいが
机に寄りかかって静かにしていると、聞こえないはずの蝉の鳴き声が聞こえてくるようだ
長い松並木の下には仙人が並び
対座して何も語らずにいるのは南昌の仙人梅福だろう

その梅福の如き趙先生は
年若いのに心がさっぱりとした高徳の士だ
彼が治める地では訴訟事は無く、多くの賓客が列を作り
ゆったりとしていてまるで絵画の中にいるかのよう

五色の絵の具を使ったあざやかな絵画は珍しくもないが
この絵に描かれる真なる山こそ我が身をゆだね全うするにふさわしい
もし功績をあげてから隠遁しようなどとぐずぐず考えていたら
武陵の桃花に笑われてしまうだろう

■解説

韻字は、「天・連・前・煙・沿・年・邊・巔・湲・緜・蟬・仙」で、下平一先の韻。「子・士・裏」で、上声四紙の韻。「珍・身・人」で、上平一一真の韻。七言古詩。武部筑摩に訳注あり。

大野・安注は天宝一四年（七五五）の作とする。

趙炎なる人物が描いた山川の絵画に賦したもの。眺めている内に絵画の中に入っていって、蟬の声を聞いたり、神仙にであったりする。その連想から絵を描いた趙炎を神仙に重ね合わせて褒め上げている。

絵画に描かれているものを歌う中で、峨嵋山・羅浮山に次いで、赤城山と蒼梧山が登場する。赤と蒼といった色彩語の対比のための登場で、赤城山はお定まりの霞を伴っている。絵画に描かれた神山としての天台山を描写したものである。

【51】同族弟金城尉叔卿燭照山水壁畫歌

族弟の金城の尉叔卿と同に、燭もて山水壁畫を照らすの歌

李白

☆前集等収録せず

★文苑巻三三九、全唐詩巻一六六、宋本巻六、王注本巻七

■本文と訓訳

高堂粉壁圖蓬瀛　高堂の粉壁に　蓬瀛を圖し
燭前一見滄洲清　燭前　一たび見れば　滄洲清し
洪波洶湧山崢嶸　洪波　洶湧し　山は崢嶸
皎若丹丘隔海望赤城　皎として丹丘の海を隔て赤城を望むが若し

光中乍喜嵐氣滅　光中　乍（たちま）ち喜ぶ　嵐氣の滅するを
謂逢山陰晴後雪　山陰に晴後の雪に逢ひたるかと謂ふ
迴谿碧流寂無喧　迴谿の碧流　寂として喧びすしき無く
又如秦人月下窺花源　又　秦人の月下に花源を窺うが如し

了然不覺清心魂　了然　覺えず心魂清み
祇將疊嶂鳴秋猿　祇（た）だ將（まさ）に、疊嶂に秋猿の鳴かんとす
與君對此歡未歇　君と此に對すれば歡び未だ歇きず

放歌行吟達明發　放歌　行吟　明發に達す
却顧海客揚雲帆　却って顧みる　海客　雲帆を揚ぐるを
便欲因之向溟渤　便ち之に因りて溟渤に向かはんと欲す

■文字の異同と校勘

宋本を底本とする。

［清］文苑作情。［洪波洶湧］文苑作洪洶波湧。［喜］文苑作言。［谿］文苑・全唐詩作溪。［歡］文苑作心。［行］文苑作閑。

■語注

○金城…京兆府の金城県。今の陝西省興平県。○叔卿…人名によれば、工部侍郎李適の子で、字は万。天宝六年頃に卒。また詹注によれば、李叔卿には文集があり、「全唐詩」巻七七六に所収の「李叔卿詩二首」がその一部かも知れないという。○丹丘…仙境の一つで昼夜を通して明るいという。「楚辞」遠遊に「仍羽人於丹丘兮、留不死之舊郷」とある。○秦人…陶淵明「桃花源記」では、桃源郷に棲む人々は秦の圧政を避けてそこへ入ったことになっている。○明發…夜明け。

■口語訳

立派なお屋敷の白壁に蓬莱・瀛州が描かれ
灯をともして眺めれば滄洲が清らかであった
大波が湧き起こり、山々は険しく
白くあざやかであることは、光を放つ丹丘が、海を隔てて赤く霞む赤城山に向かっているかのようである
灯の光の中で、山の靄がふっと消えるのに喜びを感じ
山の北側の消え残った雪を見たのかと思ってしまった
廻る谷川の碧の流れは、ひっそりとしてせせらぎも聞こえず
秦代の人々が月下で桃源郷を捜し、窺っているかのようだ
この明かな世界に接していつの間にか心魂が清められ
重なる山々の彼方から秋の猿の声が聞こえくるかのようだ
君と一緒にこの絵に対すれば喜びは尽きず
声高に歌い、そぞろ歩きながら吟じて、夜明けに至った
そして再び振り返って絵を見れば、海に浮かぶ旅人が雲なす帆を掲げているではないか
そこで私もそれに乗せてもらい、共に大海原に船出しよう

■解説

韻字は、「瀛・清・嶸・城」で、下平八庚の韻。「滅・雪」で、入声九屑の韻。「喧・源・猿」で、上平一三元の韻。「歇・發・渤」で、入声六月の韻。長短句古詩。この詩のみ、韻字によらず、一句の語数と内容から段落わけをした。武部筑摩に訳注あり。

安注は天宝二年（七四三）の作とし、大野は不詳とする。

この詩では屈託無く、遊仙的な雰囲気を漂わせている。絵画中の光景だが、赤い霞に包まれた、例の赤城山が描かれる。

【52】求崔山人百丈崖瀑布圖

崔山人に百丈崖瀑布圖を求む

李白

☆許本巻八

★全唐詩巻一八三、宋本巻二三、王注本巻二四

■本文と訓訳

百丈素崖裂　百丈　素崖裂け
四山丹壁開　四山　丹壁開く
龍潭中噴射　龍潭　中に噴射し
晝夜生風雷　晝夜　風雷を生ず
但見瀑泉落　但だ見る　瀑泉の落つるを
如滌雲漢來　滌の雲漢より來るが如し
聞君寫眞圖　聞く君の寫眞の圖
島嶼備縈迴　島嶼　備に縈迴すと
石黛刷幽草　石黛　幽草を刷し
曾青澤古苔　曾青　古苔に澤せよ
幽緘儻相傳　幽緘　儻し相ひ傳ふれば
何必向天台　何ぞ必ずしも天台に向かはん

■文字の異同と校勘

宋本を底本とする。

■語注

○崔山人…あまり分からないが、詹注は明銭謙益の「跋郭純『蒼松圖巻』」の「崔鞏、爲李白所重。白作『求崔山人百丈崖瀑布圖』、詩以賛之。鞏字若思、蜀人。天寶中居長安、與鄭廣文交。善畫松・馬」を引く。○百丈崖…徐霊府「天台山記」に、天台観の西に瀑布寺があるといい、「寺北一里有巖、高百丈、名百丈巖、巖下靈溪」(3)とある。天台県城から西北にある、今に残る天台山の名勝のひとつ。○龍潭…【44】では嵩山近辺にあるとあった。後世の資料では、天台山にも龍潭の名が見える。龍の名を冠した河川や湖沼は各地に存したのだろう。○石黛…黒の絵の具。○曾青…青の絵の具。○幽緘…手紙などに封をすること。風景を絵画に封じ込めるという解釈も成り立つ（大野）が、ここでは、単純に絵画を封緘して贈ってくれることを望んでいると取った。

■口語訳

百丈巌の白い崖は裂け
四方に赤い絶壁が開けている
龍潭が壁の中から噴出していて
昼夜を問わず、激しい風や雷のような響きを立てている
実際には滝が落ちてくるのを見ているのだが
あたかも落ちあった水が天の河から下ってきているかのようだ
聞くところによれば、君は真実の姿を写し取る絵画を描き
そこには島々の姿まで完璧に描かれるとか
どうか黒の絵の具で奥深い草を描いていただき
青の絵の具で、古い苔に潤いを与えてください
そうして描かれた絵画を封して私に送ってくれたならば
どうしてわざわざ天台山まで足を運ぶ必要があろうか

■**解説**

韻字は、「開・雷・來・廻・苔・台」で、上平一〇灰の韻。五言排律。

安注は天宝六年（七四七）とし、大野は不詳とする。

崔山人が描いた天台山の百丈巖の絵を褒め、譲ってほしいとまで讃えたもの。あるいは崔山人が絵画の名手だと聞いて、描いてくれるよう頼んでいるもの。後者の場合、実際に頼んでいるのかもしれないが、頼みたくなるほど崔の絵が優れていると、評価するのが主眼だろう。大野のような深い読み込みも可能だが、あっさりと読んでいけば、深みや陰翳がある作品とは思われない。若年のものか、あるいは儀礼的立場で作った作ではないか。

百丈巖が天台山のものなので、天台山と関わりが深いようにも思えるが、最後になって、崔山人の絵がすばらしいので、それを眺めていればよく、わざわざ天台山まで行かなくてもいい、と言っている。この点では、天台山本体は、神山とされながらも、崔山人の絵の引き立て役になっていると言える。

注

（1）本稿は同趣旨の訳注の七本目で、先立つものは次の通り。「天台山の詩歌（其一）――六朝以前（上）」『埼玉大学紀要教育学部』第五八巻第一号　二〇〇九年。「同（其二）――六朝以前（中）」『同』第五八巻第二号　二〇〇九年。「同（其三）――六朝以前（下）」『同』第五九号第二号　二〇一〇年。「同（其四）――初唐」『同』第六〇巻第一号　二〇一一年。「同（其五）――盛唐（上）」『同』第六一巻第一号　二〇一一年。「同（其六）―盛唐（中の上）」『同』第六一巻二号　二〇一二年（刊行予定）。

（2）李白の天台山の詩は、内容から、**A**「李白自身が天台山を訪れたことを契機とするもの」、**B**「李白以外の人間が天台山を訪れることに関わるもの」、**C**「神山としての天台山を詠うもの」、**D**「山岳を描く絵画に関わるもの」の四種に分けられる。本稿では、**B**と**C**の一部、**D**全部を取り上げる。

（3）拙稿『天台山記の研究』（中国書店、二〇一一年）では、〈10〉で、三四一～三四六頁、四四二頁。

参考文献表

＊天台山の詩歌関係の資料書誌はこれまでと同じ。
＊李白関連テキスト及び注釈書等
宋刊本「李太白文集」（宋本）…平岡武夫『唐代研究のしおり　李白の作品』京都大学人文科学研究所　一九五八年
王琦輯注「李太白全集」（王注本）　乾隆二四年（一七五九）跋…中華書局版　一九七七年
瞿蛻園・朱金城校注『李白集校注』（瞿朱注）　上海古籍出版社　一九八〇年…巻数は王注本に同じ
安旗主編『李白全集編年注釈』（安注）　巴蜀書社　一九九〇年
詹鍈主編『李白全集校注彙釈集評』（詹注）　百花文芸出版社　一九九六年…巻数は宋本に同じ
久保天随『続国訳漢文大成　李太白詩集』　国民文庫刊行会　一九二八年
武部利男『李白』（武部岩波）　岩波書店（中国詩人選集）　一九五八年
青木正児『李白』　集英社（漢詩大系）　一九六五年

武部利男『李白』（武部筑摩）　筑摩書房（世界古典文学全集）　一九七二年
大野実之助『李太白詩全解』　早稲田大学出版部　一九八〇年
筧久美子『李白』　角川書店（鑑賞中国の古典）　一九八八年
松浦友久『李白詩選』　岩波文庫　一九九七年
加藤国安「李白の天台山・天姥山の詩」『愛媛大学教育学部紀要　人文・社会科学』第三六号　第一号、第二号　二〇〇三年～二〇〇四年
宇野直人『李白　巨大なる野放図』　平凡社　二〇〇九年

（二〇一二年　三月　三一　日提出）
（二〇一二年　五月　一八日受理）